Newsweek

ONJAPAN

連載コラム

Unwelcome Economic Recovery

日本の景気回復を望まない人々

構造改革が進まないなかでも経済はもち直したが
肝心の個人消費の拡大を歓迎しない勢力がいる

ピーター・タスカ（アーカス・インベストメント共同創設者）

「構造改革なくして、景気回復なし」というキャッチフレーズを覚えているだろうか。今まさに、これがまちがいだったことが実証されつつある。日本企業は高い収益を上げ、工業出荷額は空前の伸びを示している。東京の地価にまで反発の兆しが出てきた。この調子でいけば、デフレの波も収まるかもしれない。

一方で、「骨太の改革」は立ち往生したままだ。道路公団や郵政事業の民営化は、官僚組織の抵抗で難航。銀行の融資額は伸び悩み、ゾンビ企業は公的資金で生き永らえ、政府の金融システム安定策は相変わらず矛盾だらけだ。

だが改革派の主張がはずれたのと同じく、抵抗勢力が唱えたインチキくさい妙薬も無用だった。公共事業を増やさなくても雇用は回復し、有効求人倍率はここ10年で最高レベルに達している。

アメリカ主導のタナボタ的回復

この驚くべき変化をもたらしたものは何なのか。答えは、米ブッシュ政権とアラン・グリーンスパンFRB（Federal Reserve Board ／Board of Governors of the Federal Reserve System：米連邦準備理事会）議長の景気刺激策が効いて、世界経済が上向きはじめたことだ。

アメリカは日本という最高の反面教師に学び、バブル崩壊に迅速かつ積極的に対応した。金利を引き下げ、大型減税を実施し、ドル安容認を打ち出した。

結果は今のところマルだ。米経済は再び成長ベースに乗り、株価もそこそこもち直した。個人所得は伸び、住宅価格は史上最高を記録している。

アメリカは世界最大の市場だから、多くの国が固定相場制なり為替管理によって、自国通貨をドルに連動させている。つまり、それらの国はアメリカの金融政策も「輸入」することになる。こうしてブッシュ

とグリーンスパンの妙薬は、アジアをはじめ途上国の経済を再び拡大させ、その影響はヨーロッパにまで及ぶ。

こうした状況のもとでは、日本経済が回復しないほうが驚きだろう。今のところ日本経済の主な牽引車は輸出と、輸出関連の設備投資だが、回復が本格化し、日銀が量的緩和を続ければ、物価の下落は止まり、消費や投資も伸びるだろう。そうなれば、日本のタナボタ的な景気回復は意外に長続きするはずだ。

常識的には、この流れを全力で後押しするのが政府の役目だ。だが日本では、それは期待できない。

覚えているだろうか。80年代末にバブルがはじけたとき、この国の官僚は拍手喝采した。それどころか「個人主義の蔓延」や「家族や地域社会の崩壊」を嘆く官僚たちが、バブルをはじけさせたとも言える。以来、何十万もの企業が倒産。活気のあった地方都市はゴーストタウンと化し、庶民はより豊かな暮らしという夢を捨てた。

その一方で、官僚はより強大な権限と高い地位を手に入れた。バブル崩壊を招いた張本人が、大きな顔をしている。

日本の典型的なエリートは、社会の頂点に立つために必死で受験戦争を勝ち抜いてきた元ガリ勉だ。彼らは滅私奉公の精神を、少なくともそれが「下々」の人間に要求されるかぎりは強固に信じている。彼らにとって、サラリーマン人生を敬遠する今の若者は嘆かわしいかぎり。中高年エリートはその姿を見るにつけ、日本を救わなければというゆがんだ使命感に燃える――1930年代の日本の官僚のように。

庶民が金持ちになるのは悪？

この種のエリートは無意識のうちに、消費主導型の景気拡大を脅威とみなす。そうした景気拡大は、過剰消費や社会の激変を伴う。教育レベルの低い人たちが急に金持ちになってのさばり、若者は年長者に逆らうようになる。新興企業が果敢に競争を仕掛ければ、談合体質のなれ合い組はシェアを失う。何よりも国民が官僚を相手にしなくなり、エリート自身の地位が脅かされる……。

それだけではない。景気回復が本格的に軌道に乗れば、エリート官僚は痛いところをつつかれかねない。ブッシュやグリーンスパンの政策を、日本はなぜもっと早く採用しなかったのか。失われた10年は、官僚の無能と無責任が招いた人災ではないのか……。

幸い、官僚たちは自分の地位を守る確実な方法を知っている。株式市場が「過剰に投機的」になり、個人消費が「過熱ぎみ」になれば、増税と金融引き締めという手慣れたやり方で内需を抑えればいい。そうすれば、長期の消費ブームという悪夢のシナリオは避けられる。

私の見方はひねくれすぎているだろうか。その答えは、今後数カ月にわたって回復基調が続くなか、どんな政策論議が交わされるかでわかるだろう。

Peter Tasker

日本の証券投資を専門とする資産運用会社アーカス・インベストメントの共同創設者。著書に『不機嫌な時代』『カミの震撼する日』などがある。